

---

# マリヤの骸

宵之口 闇太郎

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

マリヤの骸

### 【Nコード】

N4466D

### 【作者名】

宵之口 闇太郎

### 【あらすじ】

時代は明治である。華族として暮らす佐竹家の子、佐竹蒼禰は美しい子供だった。白く透き通った肌。桃色の頬。紅色の唇。黒く細い髪は、光に透かすと茶色みを帯びていた。蒼禰は、13歳の誕生日に知ることになる。蒼禰がこの世に生まれた時、物語のすべての歯車は軋んだ音を立て、狂い始めていたことを。

序章―あら人恋し―

濃ひ、血の香りぞしき。

嗚呼、生まれし赤子は蛇や鬼や。

悲しゅうて、苦しゅうて、

人恋しゅうて、

そんな我が身が浅ましゅうて、

誰ぞが我を女をみなにした。

あらあら人憎しや。

あらあら人恋しや。

こんな女をみなに、誰ぞがした…

## 第一章 邂逅と鬱屈 そして始まり

文明開化よ、散切り頭よと世間が騒がなくなり久しい年月が過ぎ  
ていた。

時代は明治である。かつて華のお江戸と呼ばれていた地域は東の  
京と名を改め、街は様相を変えた。

丁髷頭は形を潜め、闇が近づく時間になれば瓦斯灯が灯るようにな  
った。煉瓦を敷いたモダンな往来で、帯刀して闊歩する者なぞ露  
とも見かけぬ。

赤煉瓦の街並みに初めて訪れる日下部夜太郎くさかへよるたろうは、鉄道馬車から下  
車した時から首から上を右往左往させていた。

何しろ、初めての東京である。一步踏み出せば見たことのない着  
物やら建造物やらが氾濫している。街には赤青紫と、何に使うかも  
判らぬ珍奇なものを並べた店であふれかえっていた。珍しい物たち  
を一つでも見逃すまいと、周囲の目も気にせずきよるきよるとせわ  
しなく頭を動かす。ほほうこれが噂に聞く文明開化の音が、全く不  
思議な街に迷い込んだものよと夜太郎は思った。

と、そこに目鼻立ちのはっきりした、洋装の美しい男が通りかか  
った。夜太郎は

「あつ、」と思い、不意に口から

「あの、一寸ちひとその兄あにイさん。」

と、引き留める言葉を出してしまった。

マリヤの骸

「俺のことかい」

青年ははたと足を止め、夜太郎の不躰な呼びかけを気にもせずにかやかに対応した。

「ああ、あんたさ。…いえね。その、俺は初めてこの街に来たんだが、どうだいね。近頃じゃア日本人も異人さんみたいに牛を食べたり洋服着たりと、なんだかここが日の本の国だつてことを忘れっちまうよ。このままこの街に三日も居りゃあ、俺もあんたみたいに、異人さんの毛の色に変わっちまうかもしれねえな、と思つてね。」

「はは、俺の髪のことを言ってるのかい。確かにこの髪は黒くないが、俺は街に住んでいるからこんな頭な訳じゃないさ。こいつは生まれつきなんだよ。」

「へエ、するつてえとあんた、異人さんとの合いの子かい。」

すると、青年は一瞬、わずかばかり悲しそうな目を見せた。

「ま、そんなもんさね。それじゃあな、兄さん。さっきみたいにきよるきよる余所見してたらスリに遭うぜ。」

「おう、引き留めて悪かつたな。へへ、ありがとうよ。」

そう言つて二人は別れた。

光に透け、仄かに金に光る色の頭をした美しい青年は、夜太郎に背中を向け靴音をカツカツと街に響かせ去つていった。

## マリヤの骸

佐竹蒼禰さたけあをねは、書庫の隅に座り読書していた。

薄暗い室内であった。

しかし窓から流れ込む光は明るく頁を照らし、蒼禰が手にする書物は、いつそ眩しい程に輝いていた。

蒼禰は美しい子であった。透き通るように白い肌、怖いほどに紅い色の唇、黒く長い髪は潤んだ艶を帯び、切れ長の涼しい目の上には完全な形の柳眉が乗っていた。街に出れば子供であると知りながら誰もが振り返るような、そんな美人である。

時刻は昼を過ぎていた。蒼禰は昼餉を食べた後すぐに書庫へ向かったので、少しばかり漫然としていた。

ほ、と欠伸を一つする。柔らかな午後の日差しはどうにも緩やかに眠気を誘うのである。少し目を休めようと、書物から窓の外へと目を向ける。庭は善く手入れされており、蒼禰の大好きな薔薇の花は今年も見事に咲き乱れていた。

麗らかな午後であった。雀のさえずりも遠く響きわたり、まだ夏になりきれしていない雲たちが青空に浮かんでいる。窓の外から室内の薄暗い本棚へと目をやると、網膜に日向を惜しむように光の粒子が残像した。蒼禰がそのきらきらした微量なる光の欠片をうつとりと観察していると、廊下からはたぱたと慌てたような女の声が聞こえた。

「あをねさま、あをねさま」

女中のおつねであった。

おつねは書庫の扉をどんとどんとと乱暴に叩き、蒼禰に声をかける。

「ああ、蒼禰さま。ここにいらつしやるのでしよう。リチャード先生がお見えですよ、お勉強のお時間です。」

リチャードというのは蒼禰の家庭教師で、体が弱く学校へ行けない蒼禰の為に親がわざわざ捜して雇った青年であつた。

「あら、もうそんな時間かしら。いいわおつね、今行きます。」

蒼禰は楚々と着物の裾や髪の毛の乱れを直し、足早に書庫を後にした。「先生、お待たせして申し訳ございません」

蒼禰はそう言つて、自室の扉を開けた。

「いいですよ、蒼禰さん。貴女の事ですから、また読書に耽つていたのでしよう。」

色素の薄い瞳と髪の色を持った青年は、窓際に立ちゆつくりと微笑んだ。蒼禰はその様子に、胸をとくん、とひとつ打つ。

「え、ええ……。今日はお父様の書庫で、シエイクスピアのお話を読みました。」

すると青年は柔らかに頷き、薄茶の目を細めた。

「そう、本を読むことは良いことですよ。本を読むだけで君の世界は、それだけ広くなる。」

女性が勉強する必要は無い、つて未だに言う時代遅れな輩もいるでしょうが、僕は知識を身につけた女性はそこいらの下手な男よりかずっと正確で素晴らしい仕事をすると思いますよ。」

そう言って、異国の匂いを漂わせる青年は流暢に日本語を操った。目を閉じて会話をすれば、日本人と喋っていると思われるかのような滑らかな発声だ。しかしリチャードは、英国で生まれ英国で育った、真正正銘の外国人である。

少し他の英国人と違うところは、母が日本人であり、その母に日本という国の様々な事物について教えてもらった為に日本の知識がある、というところか。

「もう、そのお話は何度も聞かせて頂きましたのに。」

ころころと鈴を転がしたように笑い、蒼禰は優しく微笑んだ。ふと顔を見上げると、そこにはリチャードの笑顔。蒼禰が目を逸らしたのは、窓からやってくる光の眩しさの為だけではなかった。

淡い、淡い、気持ちだった。蒼禰は、暖かい料理の上に乗った、すぐに溶けてしまう湯気のような淡い気持ちを彼に抱いていた。数えて十とふたつ。それが蒼禰の歳なのだから、決して早すぎであつたり遅すぎであつたりといったことはないだろう。蒼禰は、ああ、これが先ほどの本のような恋情というものかしらなど、まるで他人事のように自分の胸の鼓動を自覚した。

「さて蒼禰さん。お喋りの時間はここまでにしておきましょう。」

そう言って、青年は手慣れた動作で風呂敷から数冊の書物を取り出した。

「ところで蒼禰さんは、先ほど沙翁の本を読んだと言っていましたね。どんな本を読んでいたのですか？」  
沙翁とは、沙吉比亜。つまりシェイクスピアの日本での異名のことであった。

「はい。ロメオとジュリエットという戯曲のお話でした。」

「そうですか。珍しいですね、恋愛の話を読むなんて。」

「あら、あのお話はただの殿方とお姫様の恋い話ではありませんよ。とても哲学的なお話じゃありませんか。」

「そうかい？」

「ええ。とっても面白かったです。」

「有名な台詞があったね。『おお、ロメオ。貴方はどうしてロメオなの』…だったでしょうか。」

「わたくし、その台詞が一等好きなんです。」

にっこりと笑い、蒼禰は答えた。

「家が、地位が、名前が、あの二人を苦しめているのでしょうか？でも、わたくし思うのです。ロメオがロメオである為に、一体どれだけのものがロメオたらしめているのでしょうか。」

「…それは、どういう意味かい？」

「たとえばロメオがモンテギウ家の子息でなかったら、その人はロメオであったのでしょうか。ロメオという名前ではなかったら、ロメオとは一体誰のことなのでしょうか。」

「……。」

「先生。ロメオはどうしてロメオだったのでしょうか？ロメオはロメオと名付けられて、モンテギウ家で育ち、それがロメオたらしめたのに。それにです。何故デュリエットはロメオがロメオたらしめる物を否定したのでしょうか？そんなことを考えると、とても不思議な気持ちになります。それが、」

「面白い、というのですね。…成る程。」

リチャードは、口角を微妙に上げて目を細めた。

「面白いでしょう？何故、どうして、人間はこんなに不思議なのでしょう。」

くす、とリチャードは笑った。それは幼い教え子の大人びた発言へのおかしさでもなければ、嘲笑でもなかった。ただ、柔らかに、少しの憂いを帯びた目で蒼襦を見つめていたのである。その様子に照れたような蒼襦の目とリチャードの目が合うと、優しい口調で青年は応答した。

「ええ、だからこそ、人間というのは愛おしいのです。蟻や蜂のような合理的な社会で生ききれず、かといって決して虎や熊のように一人では生きられない。不器用で、不可思議で、精一杯、右往左往しながら懸命に生きる姿が……美しいのです。」

そう言った彼の言葉の最後は、どこか自嘲めいたような雰囲気だった。

「…先生？」

蒼禰が不思議そうにリチャードを見つめると、青年の顔はすぐにいつもの柔和な微笑みへ戻った。

「おしゃべりは此処までに致しましょうか。さ、勉学の時間ですよ。」

そうして、佐竹蒼禰のいつもの午後が始まった。

## 赤い幕間

ここは、何処だ。

赤い。

赤く、暗い。

身動きはとれるが、それは手足を動かせるのみのものだった。

どくり。

突然、私が存在するこの場所が大きく波打った。

柔らかな振動であった。

多分、あの振動に、私に対する害はないだろう。

私は、何故だろうか確信に近い気持ちでそう思った。

そこで私は、目を閉じて、私の目の前にある私の指をしゃぶった。

それは、まるでそうすることが通常であったかの如く、至極当然の動作に思えた。

口に何かが触れることがこれほど気持ちがいなものだとは。

私はその快感に、しばしの間酔いしれた。

紅い。

アカい。

私は今、赤い部屋で指をしゃぶっている。

それはとても安心出来た。

指をしゃぶっていると、唐突に下半身に妙な刺激を感じた。

指をしゃぶるのはまた違う…

それは快感であった。

その妙な快感に身を任せることにしてみる。

すると、足と足の間から急激に、唐突に、強烈な快感が襲ってきた。

足の指がびくびくとと反り返る。

どうやら、排尿であるらしい。

そして、排尿を終えると私に睡魔が襲ってきた。

指をしゃぶった快感を伴ったまま、そうして私は眠りにつく。

## 第二章 驚嘆と屏息 または思慕の序

夜太郎は、暮れなずむ街の中で一人棧橋の上に立ち尽くしていた。夕日が赤々と街を照らし尽くし、街が大火事のようにであった。

夕暮れである。街を歩く人々は忙しく帰路に就き始めている。それは、やがて来る闇に追われているかの如くにも見えた。此れから、暗い暗い夜がやってくるのだ。

「ちよつと兄さん、もう宿に入らなきゃ。一番星も見え始めたのよ。」  
夜太郎の背後から現れそう言ったのは夜太郎の旅の連れ、妹の弥生であった。

「それとも、その棧橋の下にでも野宿するつもり？私はその宿に泊まるから別にかまいやしないけど。」

「…それも良いかもなア。俺は平らなところがあったら、何ッ処にでも寝泊まり出来らあ。」

夜太郎は冗談めいた口振りで、緩慢な動作で橋の手すりから腰を動かした。

「冗談は止めて、早く宿に向かいますよ。ほら、もうじき真っ暗になるわ。」

「馬あ鹿、宿なんてすぐそこじゃねえか。狭い日本、そんなに急いで何処に行くって、な。」

夜太郎は、からからと笑った。

「もうふざけないの。明日にはお屋敷に向かうんだから、ちょっと早めに寝たほうがいいじゃない。」

「…お前、その物言いだんだん母さんに似てきたぞ。」

「当然でしょう、あの人の子なんだから。馬鹿言っていないでさつさと宿に入るわよ。全く父さんに似てずばらんだから。」

ぴしゃりと言い返した、嫌に大人びた口調の弥生は今年で満十二であった。

やれやれ全く何処で覚えてきたのだから、弥生は年の割にませた言動をする。夜太郎は、さも仕方がない、と言わんばかりの表情で弥生の後ろに続き宿へと向かった。

いつの間にか日差しは橙色になっていた。蒼禰はふと筆を進めていた手を休め、窓の向こうを見る。そこには整然と刈り込まれた樹木と、こざつぱりした洋風庭園とがあった。

夕陽に照らされたそれらは、昼に書庫で見た時とはまた別の顔を持っていた。木と木の隙間が、段々と色濃く陰ってゆく。その様に、蒼禰は少しの焦燥感と不安を感じてしまう。夜が来るからだ。

また今日も、夜が来る。暗い、怖い、………夜が。

蒼禰は夜が怖かった。別段昼間ならば暗い部屋も怖いことは無いのだが、洋灯や灯籠が有る、酷く明るい場所であっても夜は怖かつ

た。昔からのことである。もしかしたらこれは、幼少の心傷トラウマというものかもしれない。一昨日に読んだ本には、そんなことが書かれてあった気がする。

そんな事を考えている間にも、闇は迫ってきた。ああ、また夜が来てしまうのだな。蒼禰は、自分が酷く不安定な某になる錯覚を覚えた。それは自分が個体か液体か、はたまた気体であるかすら曖昧な、物質として至極不安定な感触だった。

「…どうかしましたか蒼禰さん。」

直ぐ横の椅子に座っていたリチャードが、蒼禰に話しかけた。蒼禰ははっと我に返り、右に座っているリチャードを見た。

この幾時間か彼は静かであったが、どうやら居眠りをしていた様子ではなかったらしい。

「いえ、一寸手を休めていただけです。…夕焼けが大層美しかったものですから。」

「そうですね…ああ成る程、もうこのような時間だ。」

リチャードは手元の懐中時計を見ながらうんうんと頷いた。

「今日は此処までにしておきましょうか。明日は、今日のおさらいと英語の文法についてを少し学びましょうね。」

そう言っばちりと時計の蓋を閉め、青年は柔らかな動作で立ち上がる。

「あら、もうお帰りになられるんですの？もう少しくらいこちらにいらっしゃっても…」

「はは。残念ですが、腕車くわまが到着したようですからね。」

「そうですか…」

「そんなに残念がることはないですよ、蒼禰さん。また明日も来ると言っただでしょう。」

いつもの光景だった。いつもの様に蒼禰が引き留め、リチャードがそれを制す。それは、慣習した、一種の別れ際の挨拶に近い応酬だった。

しかしリチャードはその後、少し考えるような仕草をしてから、いつもとは違う言葉を口にした。

「そうですね、蒼禰さん。もうすぐ貴女は誕生日を迎えますから。」

「え？ええ…」

「誕生日のパーティの日は、少し長く居させて貰いましょう。」

青年は、その大人びた容貌からはそぐわない、悪戯めいた笑みを見せた。それはさながら少年のような、酷く純粹な笑顔だった。

「…先生！」

「何、どうせ旦那様も、大勢お客様をお集めになるのでしょうかから。一人増えたくらい大丈夫です。」

「…よろしいのでしょうか？」

もじもじとした様子で蒼禰が尋ねる。

「はは。大丈夫でしょう。いざとなったら泊まり込むことだって出来るでしょうしね。」

「泊まり！もしかしたら、先生が家にご宿泊されるのですか！？」

蒼禰は目をいつもより少し大きく開き、頬を僅かばかり紅潮させた。それはあまり感情を表に出さない蒼禰にとっての、最大限の興奮を表していた。

願ってもいないことだった。泊まる。先生が。考えただけで楽しくなり頬が緩む。

「まあ、上手くいけば、の話でしょうけれども。」

「まあ、私おつねに頼んでみます。先生が泊まるお部屋を用意なさって。」

リチャードが半ば仕方なし、といった風に笑いかけようとしたとき、部屋の扉の外側からこつこつとノックの音がした。

「先生、お車の準備が整いましたよ。」

扉が開き、中に人が入ってきた。その途端、部屋の空気は一変した。その人物は、周囲の空気がぞつとするほどに艶やかな、妖しい美しさの、蒼禰の母だった。

「母様：お珍しいですね、直々に私のお部屋へいらっしやるなんて。」

おずおずした様子の蒼禰に声をかけられた佐竹絹代さたけ きぬよは、しかしそれを黙殺してリチャアドを見やる。

「リチャアド先生、お聞こえ頂けませんでしたが？車が到着しましたからお帰りなさいませ。もうじき日も暮れますわ。」

リチャアドは、少々強ばった面もちで頷いた。

「分かりました。では蒼禰さん、奥様。私はこれで失礼致します。…また明日。」

リチャアドがそう言って部屋を出ようとしたとき、絹代が何かを思い出した様子で彼に話しかけた。

「ああそうでした。明日は本宅にお客様がお見えになりますので、先生はいらっしやらないで宜しいですわ。」

「え？…ああ、分かりました。それでは失礼致します。」

ぱたん、と扉が閉じられた。かつ、かつという革靴の音が遠のきながら廊下に響く。残された部屋には、しんとした気まずい緊張感が漂った。

「蒼禰さん。明日はお客様がお見えになります。粗相の無いようにしていらつしやい。」

それだけを言うと、絹代は蒼禰と目も合わせず、背を向け歩き始めた。

「あの、おかあさ…」

蒼禰の呼びかけは再び黙殺され、扉は静かに閉められた。一人残された蒼禰は、知らず唇を噛みしめる。

蒼禰は母が苦手だった。嫌いといえばそうなるのかも知れない。寡黙で、厳格な性格の人だと認識していた。小さい頃から、母が泣いたり笑ったりしている様子はあまり見たことがないのだ。本でよく見るような、母性愛なぞという感情とは疎遠な人なのではないかと思うことがある。

もっと、せめて私の目を見て話して下さいでもいいのではないのかしら…そう思うと、僅かばかりにも寂しい気持ちが沸き上がった。

「あ、あをね様…」

振り向くと、閉じられたはずの扉から声が聞こえた。女中のおつねであった。

「おつね…何かしら？」

「はあ、夕餉のお支度が出来ましたんでお呼びいたしましょうかと…」

「…分かりました。部屋を片付けてから行きます。」

「アノ、あをね様…」

「何かしら？」

「いえ、あの、奥様の言付けですが…そのう」

「何なの？はつきりと仰いなさいな。」

「明日は旦那様がお帰りなさいますから、あまりお出歩きなさらない様に、との事です。」

「…分かりました。」

「ハア、それではこれで失礼致します」

ばたばたと忙しい足音は去っていった。おつねから告げられた母からの言付けもいつもの事であった。母は私を必要以上に父から遠ざけるのだ。幼い頃からそうであったので特に疑問や違和感を感じないのだが、通常の家では違うらしい。まああの母だから、今ではもう古くさいような、女性の礼儀とでも思っているのだろう。

「言付けくらい、私に直接仰ってもいいじゃない…」

誰にとも分からず、蒼禰はひとりごちた。西日が眩しい夕暮れを背にし、がらんとした部屋に長い陰が伸びる。

夜がやって来たのだ。

\*\*\*

朝と言うには少し早い時刻だった。蒼禰は寝間着のまま寝台から降り、窓へ足を進め窓掛けを開けてみた。

外はまだ薄暗く、夜明けの明星は白く煌めいている。遠くの空には暁の光が茜色に燃えていた。

思いの外早く起床してしまっただが、やることが無い。リチャードからの課題は昨日に終わり、書庫から持ってきた本は粗方読み終えた。さてどうしたものかしらん、と考え倦ねる。ちらと窓の向こうを見やれば、庭の一角で蒼禰が育てている薔薇の蕾が開こうとしていた。

まだ、朝とも呼べぬ時分である。蒼禰は昨晚の母の言いつけを思い出しながらも、少しばかりなら平気だろうと高を括ることにして外に出た。薔薇の様子を見る為である。薄い紫色の寝間着に羽織り物を肩に掛けた程度の服装で、茨の棘に引っ掛ける事を用心して髪だけは一括りに結び、誰かに見られぬ様、足早に玄関を抜けた。

庭に降り立つと路道は朝露の為か湿気ていた。土の香りが濃厚である。気の早い蝉がしゃしゃわと鳴き始め、季節が六月であることを思い起こさせる。

マリヤの骸

週に幾度か訪れる庭師が丹念に手入れしているので、庭にあまり

雑草は生えていなかった。蒼禰が下駄を履いて土の上を歩こうとも、足下が露に濡れる気配は一向に無い。庭師に剪定の時期や肥料のやり方を聞かなくてはね、と思いながら足を運ぶ。一年前に、薔が開こうとした時期の手入れを間違えて薔薇を幾つか枯らしてしまったのだ。

蒼禰が薔薇の植えてある場所に辿り着いた時、庭の近くに人影が見えた。

蒼禰は寝間着に羽織り物といった佇まいである。この姿を見られるのは流石にまずい、と思いつさに近くの茂みに身を隠すと、人影はこちらにやって来た。

「\*\*\*\*\*。」

「\*\*\*\*\*。」

ぼそぼそと何事かを言っているのは聞こえたが、内容までは聞かない。しかし、こんな朝早くからどうして庭を散歩する人がいるのだろう。

人影が通り過ぎるのを待っていると、不意にある単語が耳に入ってきた。

「……………ちえ、こ……………」

ちえこ。ちえことは、叔母の千恵子のことだろうか。叔母に用がある人なのか。否、そんなはずは無い。13年も前、この屋敷に住んでいたはずの叔母は失踪し、後に行方知れずのままだと聞いている。

すたすたと足音が遠ざかる。ひとまず見られる心配は無くなっただろうと思いい立ち上がろうとしたとき、背後からいきなり

きやつ

という声がした。

はっと息を飲んで後ろを振り向くと、そこには頭を抱えてうずくまる少女の姿があった。

暫しの沈黙が続く。ふるふると一向に動かぬ少女を見かね、蒼禰が最初に沈黙を破った。

「あ、あの……」

声を掛けると少女はびくと大きく震え、上目遣いに蒼禰を見上げた。

「ごめんなさい…あの、庭が綺麗だなんて思ってた…」

特に敵意や害意などは無いようだった。ふるふると怯える少女を前に、家の人に言いつける気も起きない。

「あ、あの…どちら様でしょう…?」

ぴくと言葉に反応した少女は、そろそろと立ち上がり頭を下げた。

「ほ、本日よりお世話になります、日下部夜太郎の妹弥生と申します！本来は今日の昼にお伺いする予定だったのですが、緊張の為に早くに目覚めてしまいました、それならばと思い立ちちょっとお屋敷に行ってみようかと…」

そこまでを一気に言い終えると、下げた頭をくいと上げて、蒼禰を上目遣いに見やる。

「…あの、本当に…」

お世話になる。昨晚母が言っていた客とはこの少女のことだろうか。しかし、「本日より」とは、一体どういったことだろう。

「お世話に…?」

「ええ、あの、暫くこちらに逗留させていただくことになっていま

したんですが…<sup>みよじ</sup>巳與治様のお誘いに甘えて…」

成る程、それで父が帰ってくるという事か。日下部夜太郎という人物は、父の巳與治と知り合いなのだろう。

「あの、それで、できれば私が今朝ここに居たことは内緒に…」

弥生が気まずそうに人差し指を唇に当てながら言う。自分としても、朝早くにこんな姿で庭に居たことを知られたくはない。

「ええ、分かりました。秘密に致しましょう。そのかわり、私がここにこんな格好で居たことも内緒にして下さいませんか？」

ぱあっと顔が晴れ、ほっとしたように弥生は胸を撫で下ろした。

「ええ、勿論です。じゃ、ゲンマンしましょ。」

ゲンマン、とは何のことだろうか。蒼禰は、弥生が差し出した右手の小指を不思議そうに見つめた。

「……………ゲンマン、もしかして知らないですか？」

「ゲンマンって…?」

弥生は驚いた様子で蒼禰を見つめる。

「あら、吃驚！何か約束するときはこうしなきゃいけないですよ。」

そう言って、弥生は無理矢理蒼禰の右手を取り、右手の小指と弥

生のそれをからげた。

「ゆーびきーりげーんまーん、嘘ついたら針千本のーますッ」

弥生は世にも恐ろしいことを平気で口にし、ぶんぶんと繋いだ指を縦に振る。最後にからげていた小指と小指を離し、言った。

「ゆーびきィったっ」

とつさに蒼禰が右の小指を隠して恐々と弥生を見つめると、弥生はくすくすとおかしそうに笑う。

「あははっ、ユビキリゲンマンはこうやるんですよお。大丈夫、本当に針飲ませたり指切ったりしないから。」

それでも、さも痛そうに小指をさする蒼禰を見て、弥生は吹き出した。

「見かけによらず恐がりさんなのねエあなた。……………あら、そういえば名前聞いていなかったわ。あなたのお名前は？」

いつの間にか敬語が抜けている弥生を、蒼禰は少しばかり悔しそうに見返す。

「笑い事じゃないのに…私の名前は蒼禰、佐竹蒼禰です。」

「あおね、ね。分かったわ。約束よ、誰にも言っちゃ駄目ですからねッ」

そう言つと、弥生は慌てたように空を見た。

「ああ、もうお日様が出てきているじゃない。もう宿に戻らなければ……それじゃあね、あおねさん。また昼に！」

弥生は慌ただしく駆けていった。入り口とは違う方向へ向かったので、きつと裏口から出ていったのだろう。残された蒼禰も、母やおつねが起きないかと冷や冷やしながら玄関へ戻る。

部屋へ戻る前に、ちらと庭を振り返った。しかし、もうそこに弥生やあの人影は居なかった。さつきまで弥生と居た場所に残っているのは、薔薇の芳香と初夏の爽やかな朝焼けだった。

弥生は朝方の街を一人ぽつねんと歩いていた。夜太郎はまだ宿で眠りこけているだろう。さて屋敷に戻るのも気が引ける。この暇をどうやり過ごそうか、と時間を持て余し、近くの棧橋でぼんやりと考えることをする。

それにしても、と先ほどの出会いに思いを馳せる。今朝、あの屋敷に忍び込んだ時に出会ったアオネという人は。

とても美麗だった。

自分のくせつ毛とは違い、美しく長い髪や端正に整った顔立ち。背丈からして年は近いのだろうが、弥生とは月と鼈程すっぽんにもかけ離れ

た艶やかさがある。ああいった人の事を「美しい」と形容するのか。

弥生は水面に映る自分の容貌が目に入り落胆した。昔はこれでもよく親や親戚に可愛いと言われたものだが、アオネはきつと昔の自分の倍も可愛い子だったのだろう。無性に気落ちして、水面の自分を睨みつけた。

佐竹。アオネはサタケアオネと名乗っていた。佐竹の姓を名乗るのだから、アオネは佐竹の屋敷の子ということか。何故あのような格好で朝早く庭に出ていたのだろうか。しかも、茂みに隠れていたそれに、ああしていた事を知られたくないとも言っていた。何やら随分と変わった子である。指切りげんまんを知らない人なぞ初めて見た。

まあ華族のような上流階級には、庶民には思いも寄らない作法でもあるのだろう。朝早くからああやって外に出るのは不作法なのだろうか。

何にしても、不思議な雰囲気の子である。どこか陰りのある表情が雰囲気をそうさせているのかもしれない。

「お前、朝ッぱらから何百面相の変な顔して歩いてるんだよ。」

後ろから声がした。夜太郎の声である。これでは昨夜の逆である。

「変な、は余計よ、大きなお世話。あんまり兄さんがぐうすか寝ていて起きないから、暇で暇で仕方がなかったんじゃない。」

振り向くと、寝ぼけ眼の夜太郎の顔。

「オイオイ、これでも早起きしたんだぜ。」

「…の割にはお日様がお顔を出してらっしやるけれど？全く、起きたら鏡くらい見ればどうなのよ、その頭！」

「そんな女みてエな事できるかよ、気持ち悪いったら。」

「つべこべ言つてないでさっさと着替えてきなさいな、もう。あと少ししたら朝餉ですからねッ」

夜太郎は、やれやれといった調子で肩をすくませた。

しばらくとほとほと二人で棧橋を歩いていると、弥生の前を歩いていた夜太郎が、低い声音で口を開いた。

「昼過ぎにや佐竹の旦那の屋敷に行くぜ。ここらで一等でかい西洋風の屋敷だ。弥生、お前間違つてもそのお転婆で馬鹿な真似するんじゃないぞ。」

「兄さんじゃあるまいし、場は弁えてますよ。……………それにしても、貴族院の議員さんのお家だからって、何したらあんなにご立派なお屋敷が建つのだか。きつと裏で悪い取引でもして……………」

「馬鹿ツ！口を慎め。天下の往来で不用意にそんな口きくとしよっぴかれる。カブロがどっかにいねえとも限らねえんだ。」

一瞬夜太郎の目がぎらりと鋭くなり、弥生の居る方向を振り返った。その眼光は弥生の口を嚙ませるに十分なもので、弥生はしまったとばかりに手で口を覆った。

「……………御免なさい……………」

「分かればいい。まったく、誰が場を弁えてるって？」  
にやりと笑い、夜太郎が弥生を見下ろす。

「……………。」

弥生はむっとしてぷいと横を向いた。そんな様子に、夜太郎ははたと気が付く。

「時に、お前なんであの屋敷を知ったような口振りだったんだ。俺はまだ連れていってはいない筈だぜ、確か。」

「そんなことより、ご飯よご飯！さあご飯を食べに行きましょう。ほらお腹減っちゃったあ。」

しまった、と思い弥生はとっさに誤魔化した。屋敷に行った事がばれると、夜太郎から大目玉を食う可能性があるからだ。

「ご飯よご飯。ほら早くしてよ兄さん。」

そんな挙動不審な妹を見て、夜太郎ははてと首を傾げるのみであった。

## 赤い幕間

眠りから目覚めると、何やら激しい口論が聞こえてきた。私の居る、赤い部屋の外からである。

「\*\*\*\*\*！」

「……\*\*\*\*\*。」

何を言っているのか、皆目分からぬ。普段は耳にしないような、酷く口汚い様子の言葉の羅列。

口論の度に怒りを含んだ振動が赤い部屋を揺さぶっている。ひしひしと、赤い部屋を通して感情が伝わってきた。

「\*\*\*\*\*。」

「\*\*\*\*\*！\*\*\*\*\*……。」

怒り。そして絶望。それが今赤い部屋を支配している。それほどうにも、私にとって嫌に居心地が悪いものだった。

嫌だ。

この感情は、嫌だ。

この感情は、部屋を圧迫させる。声ができる度にぎゅうと周りの圧力が増し、それが私を締め上げるのだ。苦しい。それと同時に何故だか悲しさを感じた。

気持ち悪い。

止める。

……………止める!!

そうして私は、部屋の壁を蹴った。どすどすと、あらん限りの力を使い、持てる限りの嫌悪の念を込めて。

すると、はたと口論は収まった。代わりに悲愴な呟きが一つ、こぼれ落ちてきた。

「……………」

何を言っていたのか。それはどんな意味だったのか。

取りこぼしたそれを私が拾うことは最早叶わなかったが、私にとってそんなことはどうでも良い。

ただ、酷く部屋が狭く不快だった。それが解消された今となっては、私にとって外の出来事なぞとるに足りない物なのだ。

それにしても、本当にこの部屋は心地が良い。

### 第三章 悲愴と愛欲 ときに不可解

蒼禰はいそいそと部屋へ帰る途中だった。薔薇の様子を見るだけのつもりが、思わぬ珍客との出会いで時間をくっつてしまい少し焦っていた。

母や女中達が起きてしまっているかもしれない。何とか見つからずに部屋へ戻りたい。

そう考えていた矢先、

「あをね様…？」

ぎくりとした。玄関を過ぎて二階の自室に行くまでに通る、一階の大広間。あと少しで大広間を抜けて階段にたどり着こうという所で、後ろから女の声があった。

振り向くと、そこにはおつねの姿。たすき掛けをして露わになっている、控えめに言っつてふくよかな彼女の腕は盆とその上に乗った菓子を支えていた。

「今朝のおめざをお持ちしようとしたのですが…」

「おつね…」

困ったような顔つきのおつねは、玄関のある方角を見ながら言った。

「お出になられていたんですか…」

「ごめんなさい…言いつけを守らなくて。」

蒼禰は叱られるか母に言いつけられるかと思いい頭を垂れて身構えたが、おつねは腕と同じくらいふくよかな顔を緩ませ、悪戯めいた顔で笑った。

「じゃあ奥様に怒られるといけませんから、あをね様がここにいたのは内緒にしなくては。」

ふふと笑うおつねは、蒼禰を先導するように先に階段を上る。拍子抜けした蒼禰は、おつねの大きな尻が揺れているのを見ながらその後が続いた。

「あをね様、何でお外に出ているらっしゃったんです？」

歩きながらおつねが問う。

「お庭の薔薇が…もうすぐ咲きそうだったの。様子を見に行きたくて…」

ああもうそんな季節なんですわねえ、とおつねが感慨深げに頷くと、二人は蒼禰の部屋へ到着した。

「あをね様あ、失礼いたします。おめざをお持ちいたしましたア。」

わざとらしくおつねが戸を叩きながら言う。蒼禰はここにいるのに部屋の扉を叩くとは如何したことかと暫く眉を寄せたが、やがてその真意に気づいた蒼禰も、手を口にあてくぐもった声を作り

「いいわ、入りなさい。」

と言った。

おかしさ故に二人は顔を合わせくすくす笑い合った。ちよつとした裏工作である。そうして二人は部屋に入った。蒼禰は、やれやれと言った調子で寝台に腰を下ろす。

「今日のおめざはとら屋の栗羊羹です。」

おつねが持ってきたそれは、金色の輝きが見事な大粒の栗が惜しげもなく入っている羊羹だった。

「あら、美味しそうね。とら屋さんの栗羊羹、私好きよ。」

「あらあそうですか！それは買ってきた甲斐がありますよ。………では、私はこれで失礼しますね、あをね様。」

「もう行ってしまうの？もう少しお喋りしていつてはくれないのかしら？」

今日は、何しろ先生も来ないし外出も禁じられている。あまり人とも会わないような、退屈な一日になりそうなのだ。要するに人恋しいのである。

蒼禰が寂しそうな表情でおつねを見ると、おつねは困り顔で言う。

「今日はお客様が来ますからねえ…色々と準備が忙しいんですよ。あ、お客様がいらっしやるときはあをね様も大広間にいらっしやって下さいね。」

客のことで忙しいと言われては、引き留めるのは酷な話だ。何せ、

おつねは女中達をまとめる立場の人なのだから。

「そう…分かりました。引き留めてしまっでごめんなさいね。」

渋々ながらも了承してくれた蒼禰にほっと息をついて、おつねは失礼しましたと言って部屋を出ていった。一人部屋に残された蒼禰は、羊羹を口に運びながら窓の外を見た。

先ほど出会ったあの少女は、弥生と言ったつけ。無事に見つからずに出られたのだろうか…。

蒼禰は、薔薇とその近くの茂みを見ながら弥生と名乗った少女のことを思い出す。面白い子だった。年はそんなに離れてはいないだろう。可愛らしい声と仕草だった。しかしゲンマンなんてことを知っている辺りは少し怖いな、とも思う。

何にせよ、今日の昼にはまた会うのだ。そのときはお互いに知らんぷりして

「初めまして」などと、面映ゆく言い合うのだろう。

そのことを想像すると、先ほどのようなおかしさがこみ上げて来た。楽しい。内緒ごとをするというのは何だか楽しい。体がこそばゆくなつた蒼禰は、少しだけ口元を緩めて羊羹をまた一口食べた。

栗羊羹は口に甘く、耳の下まできいんと甘さが染み渡った。

「あをね様、あをね様あー!!」

どんだん、と忙しなく叩く扉の向こうからおつねの声。焦っ

ているようだった。蒼禰はその声に目を覚まし寝台から跳ね起きた。窓を見ると太陽は高く昇りさんと輝いている。どうやら、朝早く目覚めてしまった為か午前中を睡眠に使ってしまったようだった。

「あをね様あ。」

おつねは焦っているのか困っているのか、情けない声を出している。

「おつね…！今何時かしら？」

「もう正午近くですよ、もうすぐお客様がお見えになりますウ。」

しまった、失敗したと思った。和服を着るのには時間が掛かる。もうすぐお客様が来るといふのならそれなりにきちんとした格好であるべきだが、これでは和装は難しいかもしれない。時間を考えると洋装が妥当ではあるが、蒼禰は洋装があまり好みでは無かった。

「あをね様あ…」

扉の向こうではおつねが泣きそうな声を上げていた。仕方がない。蒼禰は覚悟しておつねに声を掛けた。

「おつね、今日は洋装にします。着替えを手伝いなさい。」

はたとノックの音が止み、おつねは扉を開けた。焦りながらも少しだけ安堵している彼女のその手は、すでに洋服を持っていた。やけに準備がよいことを訝ると、

「奥様が、今日は洋装にきなさいとおっしゃっていたのですよう。あをね様がいつも洋装をお嫌いになるからわたしも困っていたんで

すが、ご自分から着てくださるのは吃驚です。」  
ということだった。

「仕方がないわ。今日は寝坊してしまったのだから時間が無いもの。」

「はア、奥様としては怪我の功名みたいなものですな。さあさ、お着替えをお手伝い致しますよ。今日のお召し物はメリンスの西洋服でございます。」

「まあ、そんなに大げさな着物を着てお出迎えするほど大事なお客様なのかしら。」

「え、何でも旦那様が直々にお呼びなされたお客様だとか。きっとお仕事の事ですねえ。」

無学なわたしには旦那様のお仕事なんて分かりやしませんですけど、とぼやきながら、おつねは蒼禰の背中にある紐を勢い良くぎゅっと結んだ。

「……………っ！」

蒼禰は息の詰まる思いで、実際に息が詰まっているのだろうが、唇を噛みしめた。

## マリヤの骸

これだから西洋の服は嫌だ。腰をきつくきつく締めることは苦しくて仕方がない。如何に女らしい出で立ちになろうとも、こんなに腰を締め付けられて顔色が悪くなったら美しくはないに決まっている。西洋の女の人の目と眉毛がつり上がっているのは、きつとこの

為なのだ。

「おつね、もう少し腰の所を緩くしてくれないかしら。」  
「申し訳ありません、これ以上緩めるとお背中がみつともなくなってしまうんです。」

はあ、と嘆息した蒼禰は姿見を見る。何だか奇妙な格好である。びらびらとした足下や袖についた布。蝶々飾りを纏った格好。奇妙以外の何者でもない。

もう一度深くため息を吐くと、おつねが蒼禰の背中をぽんと叩いて言う。

「よくお似合いですよ！さ、一階の大広間へ行ってらっしゃいませ。お急ぎなさいませね。」

これが似合うというのは、果たして誉め言葉なのだろうか。兎に角、蒼禰はお客様が来る前にと大広間へ向かった。

弥生は豪勢な：本当に豪勢としか形容できない屋敷の正門に立っていた。門の先に見えるのは御大層な石燈籠やら敷石やら見慣れぬ花やら、端々まできつちりと手入れされた洋風の庭はいつそ空恐ろしい。門構えにおいては鉄の棒を奇妙に捻じ曲げたような造りである。それに絡みついた蔦がまたおぞましい。なんとも珍妙な様相を呈しているものである。

弥生の隣にはもちろん夜太郎がいた。この珍妙な屋敷の入口に立った二人は暫時呆れた。また随分と厄介なところにお世話になるとだと思いながらも、弥生の心には何とは言えぬ高揚感が滲んでいた。それは今朝方に会ったアオネという人にもう一度会えるという期待からだろう。

「んじゃあ早速、中に入ることにするかい。」

夜太郎は右手で門の取っ手を掴み横に引こうとした。しかしそれはびくともせず、金属のがちゃんという音が響いたのみだった。

おやと夜太郎が思う間もなく弥生の手が横から伸び、すっと取っ手を握って軽く押した。今度はすんなりと開き、二人は中に入るこゝとが出来たのであった。要するに門は引き戸ではなく開き戸だった。

「お前、よく知っているなあ。」

惚けた風に夜太郎が言うと、

「世の中の門が全て引き戸だと思っている兄さんの方がおかしいのよ。」

と一蹴。実は今朝に裏口で同じ失敗をしたとは言い出せない弥生であった。

敷石のとおり道を進むと、すぐに玄関が見えてきた。玄関の前では何やら男が二人ほど立ち話をしていた。こちらの存在に気がつくると小さく会釈をしてすれ違って行く。何やら陰気な雰囲気のある二人であった。

家の造りは西洋風とでも言うのだろうか、とにかく奇怪な石造りの建物であった。二階建ての屋敷は凹の字を門を正面に向けて書い

たよつな形で、玄関口はその真ん中、凹の窪んでいる部分にあつた。

それにしても鬱蒼とした庭である。西洋風の垣根に沿って植えられている樹木は高さがある訳ではないのに庭の外と内とを断絶している。生い茂るそれらは決して太陽を求め自由に生い茂っているとは言い難い、不自然に刈り込まれた人工物であるからかもしれない。気の早い蝉がぢぢと鳴き始めている。暑い。しつとりと弥生の首筋に汗の玉が浮かび上がっている。屋気楼のような揺らめきが夏の到来を予感させ、石造りの足もとから熱気がむあんと下から押し上がってくる。初夏の太陽に眩暈を覚えそつに為るほどだ。

それなのに、何処か背筋がぞくとするのは何故なのだろうか。

「御免下さい、日下部です。」

夜太郎が扉を叩いた。それで弥生ははつとする。茹だる暑さに莫迦なことを考えてしまっていたようだ。

がちゃ、と扉が開く。中から顔を覗かせたのは、厭に血色と体格の良い女中であつた。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4466d/>

---

マリヤの骸

2008年11月16日16時30分発行